
Twinkle...Twinkle...

幸華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T w i n k l e . . . T w i n k l e . . .

【Nコード】

N 4 3 7 4 Q

【作者名】

幸華

【あらすじ】

いろんなキラキラを集めてみました☆

☆まずはじめに☆

『キラキラ』

意味

断続して美しく光り輝くさま

またの意味を

“あなたの笑顔”

☆ゝ☆ゝ☆ゝ☆ゝ☆

ここからいろんな人たちのお話

『キラキラ』

を書いていきます！

思うことや感じることはそれぞれ自由・・・

とゆうことで♪

なお、これは1話完結の短編集です。

だから、読む順番は決まっています。

気になったものから好きなものをどうぞ♪

私の心がいっぱいになったら

書くので、投稿は不定期です。

もちろん完結もしません☆

これを読んで、皆さんの心になにか感じるものがあれば
すっごいうれしいです♪

そんな方は、ぜひ、

コメントください☆

分かりずらく、伝わりにくいと思いますが
頑張って書くので読んでください♪

P I N K A

心の奏でる音は（前書き）

女の子目線で語りです。

桜が寂しくも美しく舞う季節にいる彼女を
応援してあげてくださいね。

（※これは、私の別サイトにのつけていたお話です。
すこし文章を変えました。

なので、モデルなどはいません。悪しからず・・・）

心の奏でる音は

・・・この音は何だろう・・・

・・・心にやさしく響く音は・・・

☆
～
☆
～
☆
～
☆
～
☆

『こうして僕たちー』

『わたしたちはー』

『卒業の日をー』

『迎えることができましたー』

『学校のー仲間たちー』

『素晴らしいー思い出をー』

『『ありがとうー』』

『『さようならー!』』

今日は高校最後の日・・・卒業式。

ほとんどの人はそれぞれにあるいろんな想いで涙を流している。

ここからはみんな、それぞれの未来に向かっていくため

もしかしたらもう会えない人も出てくるわけで・・・

そして・・・

そうなる前に想いを伝える人もいるわけで・・・・・・・・

18年間ずっと一緒に幼馴染のあいつは、
さっきから何人かの女子に告白されているのが
嫌でも目に入ってくる。

あいつはちよつと顔を赤らめながら
人差し指で頬をポリポリかいた。

受けたのか。

断ったのか。

すごく気になった。

もちろん興味本位ではなく、茶化するためのネタでもない。

ただ、その様子を見てみると
心の中には止みそうにない不況音が響いてくる。

☆
☆
☆
☆
☆
☆
☆

いつもの帰り道。

いつも以上に長い沈黙。

いつもより少し早足なあいつ。

お互いに変な空気をかもし出して黙ったまんまだった。

あたしはあんな光景を見た後で、すらすらと話し出すことができなかった。

しかし・・・ここで、あのことを聞いてみる。

じゃないとこの空気に押しつぶされそうで・・・落ち着けないから・・・

「・・・あのさあ!・・・」

「っ!!!・・・ん?」

びっくりしないでよ・・・こっちもびっくりする・・・

「き・・・今日・・・こ・・・告られてたじゃん?」

「!・・・まあな・・・」

「・・・っで?どうしたの?」

いつもみたいになってみた・・・つもり。
ちよっと茶貸し気味になってみた・・・つもり。

あいつはチラッとこっちを見ていった。

「・・・断ったよ！」

「ふうん・・・」

《ほっ》っていう音が聞こえた気がした。

そしたらあたしの中の何かのスイッチが押された。

その瞬間、心のリズムが早くなった。

何でか分からないけど、いままでの2人の思い出が、走馬灯のように心に流れてきた。

楽しかったことや、イタズラして2人そろって親に叱られたこと・

・
ケンカしてお互いに泣きじゃくったことや、おそろいのキーホルダー・・・

いろんなところに遊びに行ったこと、2人とも大好きな遊園地・・・

いつのまにか足が動いてた。

あたしはあいつの蒼いきれいな瞳をまっすぐ見つめて
あいつの真正面に立っていた。

「!？」

考えるより先に口動いた。

「あたしね、初めてあんたにあったときからさ、ずっと・・・ずっと好きなんだ。」

あたしらしいとも一緒に・・・ケンカばかりして・・・でもない
と寂しくて・・・

あたし・・・あんたのことが大好きい!!!!!!!!!!」

口から飛び出た今までの想い・・・

言葉になってたのかもわからない。

あいつは一瞬驚いた顔をしたあと、いつものくしゃくしゃ笑顔で大きく頷いてくれた。

「うん 俺もだ・・・ずっと好きだった・・・」

ハハッ・・・

やっと心が繋がった」

ふわっ・・・

あいつはあたしを、やわらかくもギュッと抱きしめてくれた。

・・・この音は何だろう・・・

・・・心にやさしく響く音は・・・

ああそうか、これは

あたしとあんたじゃなきや奏でられない
素敵なメロディー・・・

優しくあたしを離すと

「これからもずっと先も・・・一緒・・・な？」

長い間一緒にいて、あんたのこんな顔見たことなかった。

キラキラとしたとても優しい、あたしだけをまっすぐ見つめる笑顔。

長い間？？いいえ、まだまだ。

あたしとあなたのメロディーはここからきれいな音を奏でていく。

あなたの問いかけに、あたしは返事をした。

心を表すように、ピンク色の桜の花びらが舞って・・・

……END……

心の奏でる音は（後書き）

こんにちは！！PINKAです♪

読んでいただいてありがとうございます。

初投稿のこのお話、どうでしたか？？

今回の季節は、卒業式。

みなさんにもいろいろ思い出があるのではないのでしょうか？

（私はもっぱら友人との思い出ですが…）

これを読んで、「あゝあんなこともあった」と思い出していただけ
たらいいなと思います。

駄文ですが、感想、お待ちしております☆

また、誤字・脱字、その他ご指摘がありましたら、よろしく願
います。

1／28 PINKA

ケーキの上の幸せ（前書き）

第三者目線で、ときどき女の子の心情もはいつています。

12月の、街がもっとも輝く季節・・・

ケーキは欠かせないですよね♪

（※これは、私の別サイトにつけていたお話です。すこし文章を変えました。

なので、モデルなどはいません。悪しからず・・・）

ケーキ上の幸せ

(あ．．．．．珍しいなあ．．．)

今日はクリスマスイウゝ。

しかもホワイトがつく。

「今年は粉砂糖の飾りか．．．ありがとう．．．だな♪」

そうつぶやくと手に持っているやけに大きいクリスマスケーキの箱を、少しの間見つめながら歩いていた。

家では彼女があったかい料理をつくって待っている。

彼女とは具体的にいつから一緒だったのかわからない。

だが、小さいころから2人は一緒だった。

毎日一緒に遊んで．．．
いたずらして怒られて．．．
学校でも一緒に．．．

終始漫才みたいな喧嘩（という名の会話？）をして…………

現在は同居中である。

☆～☆～☆～☆～☆

（あ！雪じゃん！！もう…………遅いなあ…………ま！料理の続き頑張ろ♪）

彼との思い出の曲を鼻歌まじりに歌いながら料理を作りはじめた。

もうそろそろで完成…………
とってたころ…………

「たっだいまあ～♪」

「おかえり！Dinnerができてるよ☆」

「おー！！てか何でそこ発音が…………」

「ん…………一応今日クリスマスイウだから♪」

「は！？意味わかんねえ！」

「えー!? だってクリスマスって外国のイメージない?？」

「まあ・・・ある・・・けど・・・（まあいいや!）とりあえず腹減った!! 早く食べよ♪」

「はいはい♪」

少々小さいテーブルは、たくさんの料理で埋まっていた。

ケーキをテーブルの真ん中に置く。
もちろんまだ箱に入ったままで。

「そんじゃあ!・・・・・・・・・・」

パンツ!! パンツ!!

「「メリ〜クリスマス♪」」

クラッカーの紙吹雪やらなんやらをそのままにプレゼント交換が始まった。

「ほいっ! プレゼント♪」

「ありがと♪じゃあ〜・・・はいっ! プレゼント〜♪」

「ど〜も♪開けていい?」

「もちろんだよ!! アタシも開けるね♪」

「ううわぁ!! すげえ!! いつの間にこんな作ったの??」

「頑張ったんだよ♪アタシのは・・・わぁぁ♪キレイ〜♪」

「だろ? 絶対お前に似合うと思って」

「あ・・・ありがとう・・・! 今つけていい??」

「あぁ、オレがつけるわ。」

「ありがとう♪」

「オレも今これ巻く。」

「じゃあアタシが巻いてあげる!!」

「ありがとう♪」

彼は彼女の目と同じ色の宝石がついているネックレスを、彼女は彼に似合いそうな色の手作りのマフラーをそれぞれプレゼントした。

そしていよいよケーキなのだが・・・

「・・・なんかバランスおかしくない・・・??」

そう言ったのは彼女。

明らかにバランスが変なのだ。
どう見たってお菓子でできた家が大きすぎる。

「まあいいじゃんか!! 早く切って♪」

「何よそれ♪いつも変に細かいくせに。こういうときに限ってお子様なんだから!!」

「なんだよお子様って!! もういいから・・・ほら! 早く切って!!」

なんだか調子狂うなあ・・・とか思いつつケーキを切っていたら

「このケーキ、オレが買ってきたから、サンタ食べる。お前はトナカイあげるわ」

「はあ!?! なにそれえ!! こーゆーときは、レディーファーストでしょ! あたしがサンタさん食べる!! あんたトナカイね!!」

「そういう時に限って・・・ずりい!!」

「なにがよ!! 当然のことでしょ!!」

ああ・・・またいつもの子供みたいな喧嘩が始まった・・・
ケーキの上のサンタさんとトナカイさんの飾りをめぐって・・・

・
—10分後—

「もういいわよ!!このケーキ、アタシ一人で食べちゃうから!!」

「フン!!勝手に食べ!」

そういうと彼はソファーにドカッと座り込んでそっぽを向いてしまった。

なんともくだらない喧嘩だが、もちろん気持ちは本気で怒ってるわけではない……。

（もう……せっかくクリスマスなんだから、喧嘩しないようにしてたのに……。

サンタさん……助けてくれないかな……?）

（本気で怒った……?いや……きっと大丈夫……!ここまで
は予定どおり……せっかく雪も降ったし……うまくいきますよ
うに!!!）

「ほ……本当に知らないんだからあっ!!」

カポッ！！

「!?!?!?なにこれ?!?!」

やけになってテキトーに掴んだもの・・・お家をとってみるとそこには小さな白い箱がぽつんと置かれていた。

「ねえ・・・なあに・・・?これ・・・?」

彼は微笑みながら彼女を見つめていた。

早く取って。中見て。

と言うように・・・。

彼女が箱を取り蓋を開けてみるとそこには・・・

「ゆ・・・ゆびわ・・・指輪ツ!?!」

それはさっきもらったネックレスと同じ色の宝石がついた指輪だった。

「なあ・・・オレ・・・ずうっとこのサンタとトナカイみたいに、お前の最高のパートナーになりたいんだけど・・・?」

言葉なんて出てこなかった。
ただただ嬉しくて涙が溢れた。

アタシは何度も何度も大きく頷いた。

そして気がついた・・・

いつも変に細かい彼が、バランスが悪いのを全く気にしなかったのも、喧嘩をふっかけてきたのも、勝手に食えなんて言ったのも、全部彼の演技だったことに・・・

彼は彼女の涙をそっと拭うと指輪を左手の薬指にはめて

「永遠の愛を誓います」

この顔・・・小さいときからときどきみせる、たくましくも優しい笑顔。

目がキラキラと光る あ顔…

まるであの宝石のように…

「永遠の愛を誓います♪」

彼女も目を彼の目にしっかり合わせて言った。

C h u . . .

彼は彼女の額に触れるだけの優しいキスをした．．．．．

（サンタさん．．．ありがとう！）

ケーキの上のサンタとトナカイは2人を見守るように甘い甘いケーキの上に座っていた――

．．．．．E N D．．．．．

ケーキの上の幸せ（後書き）

こんにちは！！PINKAです♪

読んでいただいてありがとうございます。

第2話です！！いかがでしたか？？

今回はクリスマスという、今の季節から外れまくってますがそこはスルーと言うことで・・・（汗

結婚っていいなあ・・・ってつくづく思うこの頃・・・

サプライズっていいなあ・・・ってつくづく思うこの頃・・・

みなさんはどうでしょうか？？

まだまだ文章力のない私ですが、感想お待ちしております☆

また、誤字・脱字・その他ご指摘がありましたら、よろしく願います（へーへ）

2／4 PINKA

H e a r t T r i c k (前書き)

女の子目線です♪

元気で若干テンション高めな女の子の幼いころからの想いの行方は、
魔法使いにでも聞いてみましょう☆

Heart Trick

「次！あっちあっち！！」

「おう♪」

あたしたちは今日、遊園地に来てるんだ♪

今のイベントはハロウィンで、あたしもこいつも一番気に入ってる
シーズンなんだよ♪

ああ、こいつってのはあたしの幼なじみ。

いっつも明るいき、楽しいこと大好き！バカで子供っぽくて、笑顔
がたえないいいヤツだよ☆

こいつとは小学生くらいのに、いつのまにか一緒に遊んでたの
が仲良くなったきっかけ。

もっとも・・・声をかけてきたのはこいつからだっただけ。

現在は、あたりは暗くなってきて怪しげにライトがひかってて・・・
・・・

ライトアップされてるカボチャたちは、なんだかちよっぴり怖いけ
どそこがハロウィンの楽しいところ♪

さて・・・今日は・・・ジェットコースターも乗ったし・・・観覧車にものったし・・・。

ハロウインのパレードも見てハロウインのお菓子もデザートも食べたなあ・・・。

そういえばこいつ、すごい甘党だから甘いのはっかり、いっっぱい食べてた・・・初めて会ったあの日もチョコレートパフェにがついてたっけなあ・・・。

・・・そんなこと考えてたらアトラクション再開の時間が!! さっきまで「点検です」とか言っただけで休止してたんだよ!! やばッ!!!

「おい! 早くしろよ!! やっぱお前、足遅えなあ」

「なによ! あたしここ来たら足早いんだから!!!」

本当にそうなの? という質問はスルー・・・

あたしたちはこの遊園地で1番人気のジェットコースターに向かって全速力で走ったの!!

だって2時間待ちは普通だもん・・・のんびりしてたら大変!

着いてみると、やっぱり人がどんどん並んでく。

あたしたちもさっそく並んでみたものの・・・こいつはずっと顔が固くなくなってる・・・。

なんでそんな顔・・・絶叫系は大好きなハズだし・・・長時間並ぶのも心してきたハズなんだけど・・・

こういうの本当はイヤなのかな？？

そうだとってもなんか・・・

— い つ も と 違 う —

そんなこと考えてたら、突然声をかけられた。

「なあにシケた面してんだよ。お前が乗りたいって言うから並んでんのに。これからもっと楽しいことがもっと起こるんだぜ？・・・だから・・・もっと楽しい顔しろよな？」

「えっ・・・あ・・・うん!! そうだよね!!」

なあんだ。勘違いか・・・。

ん？・・・もっと・・・って・・・？

そのあと普通に喋ってたけど、やっぱりなんか変だった。
少し緊張してるような、何か考えてるような・・・。

乗ってからは隣のバカと一緒に叫んでたよ・・・キャハハ♪

この恐さがたまないんだな♪絶叫系は♪

そして、落下中に撮られる写真にはカメラ目線でバツチリピース☆

うん！いい思い出♪

だけど・・・あたしが写真を眺めてたら、あいつはケータイを見る
なり慌てた顔して

「ごめん。ちょっと電話してくるわ」

タタタタタ・・・。

また行っちゃった・・・。

これで本日 5回目の「電話してくる」。

もう・・・何の用なのよ？

なんで今日にかぎって電話ばかりなのよ？

せっかく遊びに来たのに・・・

あんたから誘ってきた
くせに・・・

☆～☆～☆～☆～☆

もうすっかり太陽は地球の反対に出かけたらしく、
辺りはカボチャの怪しい光たちのみ。

「はぁあ～～～～・・・」

あたしがため息をついてたらあいつが帰ってきた。

「あ・・・おまたせ・・・」

「長かったね・・・誰に電話?？」

「え・・・ああ・・・まあ・・・ちよつと・・・」

「ふうーん・・・」

ほらまたそうやって言葉を濁すんだ・・・

いつもはそんな風にしないでくせにさ・・・

なんなのよ・・・もう・・・

あたしは好きな場所には好きな人と一緒にしか来ないつづうのに。

だから今日は・・・

簡単には伝えられない気持ちを・・・

・・・あああ！こんなこと悩んでも楽しめないよおツ！！
・・・とりあえず場の空気は崩さないようにしよ・・・

「・・・ああ！！夜のパレードが始まっちゃうよ！！場所とりなきゃー！！」

「えっ！！？」

あたしはあいつの手をとってさっきより早く走った。

夜のハロウィンパレードは、雰囲気を一層こわくし、それがまた楽しかった。

さっきまでのもやもやな、どこか悔しい思いはもうふっ切って、楽しむことだけを考えることにしたよ。

そう・・・考えてる・・・つもり・・・だよ・・・？

☆～☆～☆～☆～☆

今はこの遊園地のシンボル、お城の前。

そろそろ閉園の時間・・・

もう帰るのかぁ・・・

そう思ってたら・・・

「なあ、オレ・・・ずっとお前に隠してたことがあんだけど・・・」

「!? 何??」

「オレ・・・実は・・・魔法使いなんだ♪」

「・・・は？」

とうとう頭がイカレた!?

ただでさえバカなのに・・・

って!! それなに!?

あいつはどこから取り出したのか魔法使いが被るようなとんがり帽子をかぶってた。

「イヒヒヒヒ♪」

「な・・・何言ってるの? 意味わっかんないんだけど!!」

「まあまあ♪今から証明してやっから!! さあ!! 魔法の力を
ごらんあれえ☆」

と、大声で叫びながら両手を高く上げると・・・

ヒュ~~~~・・・バァァァン!!
バァン パラパラ!!

(わ・・・・・・・・)

火花が・・・上がった・・・

あいつはこっちを見てニツと楽しそうに笑ってる・・・

キラキラ・・・

そう・・・あたしはこの無邪気な楽しそうな笑顔が初めて会ったあ
のときから大好きなの。

心から楽しそうに笑う顔はあたしには眩しいくらいだよ。

「どおだあゝ？♪すごいだろおゝ？？♪」

「・・・うん・・・」

「?? なんだよゝあんま乗り気じゃねえなあ!? じゃあ今度はお前に魔法かけっぞ☆」

「え!?!? どゆこと・・・??!?」

いつの間にかあいつはあたしの顔を覗き込んだ・・・

「お前にしか使えない魔法のコトバ・・・ I love you・・・」

あたしたちの真上では、彼の魔法によって花開いた色とりどりの星が輝いている。

（うそ・・・・・・!!）

私はすぐに返事ができなかった。

だってびっくりしすぎて、声が出ないんだもん・・・

あいつの透き通るような色をした瞳はあたしの答えを待ってる。

あたしはそれに吸い込まれるように返事をした。

「・・・I・・・love・・・you・・・too・・・!!」
「あいきい!!」

あたしはあいつの胸に飛び込んだ。

あいつはあたしを強く受け止めてくれた。

あいつはあたしを抱きしめながら

「今日ずっと電話ばっかでごめんな。これのためだったんだ。いっぱい待たせちゃって・・・オレ・・・」

「いいよそんなの!　これでもう　ちゃらだもん!」

「これで?　これだけで?」

「え?　うん!　すごく嬉しいよ?・・・」

(どうしてそんなこと聞くの???)

そう答えると、あいつはあたしを離してフツと笑った。

(????)

パチンッ☆ バッ!!

あいつが指を鳴らしたらパークが一気にライトアップされた。

「うわぁ・・・・・・・・きれえ・・・・・・・・」

「プレゼント・・・・・・・・。・・・・お・・・・お前の笑顔が見れてよかった♪

あー・・・・・・・・これから一緒にいろかな?・・・・・・・・ず
っと・・・・・・・・」

「もちろん!ずっと・・・・ずうーっと一緒にだよ♪」

『たとえ辛いときも 信じていれば 夢は叶うもの』

あたしが大好きなこのシンデレラの歌。

あいつの魔法で、あたしがシンデレラになったのは間違いないんだよね。

「ありがとう」

12時の鐘が鳴り終わっても私たちの魔法がとけることはないんだよね。

「ありがとう」

ずっと・・・ずっと大好きだからね!!

魔法使いの王子様♪

— — — END — — —

Heart Trick (後書き)

こんにちは!! PINKAです♪

読んでいただいてありがとうございます☆

3話目です!!

だいぶ間が空いてしまいました・・・

活動報告にも書いた通り、最近なにかと忙しくてなかなか書けませんでした・・・

気持ちはいっぱいあるんだけどもさあ・・・

さて、今回の話は・・・話も、ですね・・・。またサプライズになっ
てしまいました(汗)

でも・・・サプライズバンザイ です♪

そしてハロウィン!! この季節、私が大好きなので『こんなことい
いな』のシチュエーションとコラボ(?)させてみましたゝゝゝ

遊園地でこんなことができるのかは分かりませんが、実際にあった
らロマンチックですよね♪

もしかしたらサプライズ話・告白話が多くなるかもしれないです・・・

・
ですが! こんな私ですが今後もよろしく願いします☆

感想、お待ちしてます♪

3/6 PINKA

遠いけど近いこと。(前書き)

ある朝の男の子の話。

自転車通学してる人なら特にこんなことはありませんか？

初の子！！ドキドキですが何事も挑戦♪挑戦♪↑

後にこれの女の子sideも書きますので、そちらもよろしく願
いします☆

遠いけど近いこと。

今日もいつもと同じ時間に起きて、学校に行く準備をする。

「いつてらっしゃい！」

「いつてきまあす・・・」

欠伸交じり。

だってねみーんだもん。

朝早く家を出なきゃいけないから。

俺、いつもチャリで学校通ってんだよ。

あ、チャリって自転車のことな。

・・・知ってるか。

いつものようにチャリを立ち漕ぎして家を出る。

そうそう、両耳にイヤホンを入れて

お気に入りの音楽を大音量で聴きながら行くんだ。

一人きりの登校ってヒマなんだよ・・・。

車の音聞いててもつまんねえし。

学校の近くまで行かないとダチにも会えねえから。

でも、そんな悪いことばかりでもないんだ。最近。

初めのころは気にしてなかったんだけど
毎朝チャリで俺とすれ違う子がいる。

反対車線走ってるんだけど、もともと車の通りが少なくて
しかも片側だけガッツリ歩道が作ってあって、反対側は白線だけだ。

俺は歩道側、その子は白線・道路ぎりぎり側の方なんだけど
結局道路を走っちゃってるから遠くまでよく見える。

（みんなはやるなよ、危ねえ。俺は事故りかけたことあつから・・・。
）

んで、いつも同じ場所ですれ違うから
あの子も俺に気付いてるかも。

いややや！！うぬぼれなことじゃなくてだぜ！？

まあ・・・カワイイけど・・・

その子も俺と同じようにイヤホンを両耳に入れて音楽を聴きながら登校してるらしかった。

しかも歌いながら・・・。

初めは俺も口パクかと思ったんだけどよ、イヤホンぶっ壊れたときにその子が歌ってるの聴いたんだ。

お互いチャリだからすれ違うのは一瞬で何の歌かはわかんなかったけど

なかなかうまかったぜ？♪

そのころからかな・・・気になりだしたのは。

髪はロングで、さらさらと風になびいてて。

見た感じ明るそうで、きつと笑顔も素敵なんだろう。

つ、つまりは・・・一目惚れってやつ・・・

☆
～
☆
～
☆
～
☆
～
☆

ある雨の日。

雨だからもちろんチャリには乗れない。

歩いて登校だ。

お気に入り音楽をいつもよりデカイ音で聴く。

何でって？んなもん気分だよ。

雨の日って、なんかテンション下がるだろ？

いつもチャリで通ってる道を歩いていると、
遠くに水玉柄の傘が見えた。

次第に近くなると、いつものあの子だということが分かった。

（歩きだところっち側か・・・って、あたりまえか・・・。）

あの子も音楽を聴いてるらしい。
そんでまた歌ってる・・・。

（何の歌歌ってんのかなあ・・・まさか合唱の練習なわけないし。）

そう思ってイヤホンを外してみた。

そして聴こえた歌は――――――

「あの！・・・アタシたち、いつも自転車ですれ違ふよね？
なんか気になってたんだあ♪」

「あ、うん、そうだね！俺もだよ。」

質問。

なあ。

『自分の一目惚れした人が

同じ曲を聴いていたら

どう思いますか？』

・・・・・ こういう恋の始まりも、アリだよな？

遠いけど近いこと。(後書き)

こんにちは！

読んでくださってありがとうございます！！

いやゝしかし意味不明ですね・・・これ。

彼の性格もよく分かりません！

でも、私がカッコいいと思う人のいいところ取りで出来上がった人物なので

それはそれはイイ男だわこりゃ☆

さてこのお話ですが、半分くらい本当のことです♪

『恋愛部分以外』は私のこと。

毎朝会う男の子がいて、道路はガラガラ。

ガッツリ歩道と反対側に白線・道路ぎりぎり。

両耳&イヤホン&大音量、そして私の傘は水玉です^^

ほかにもいろいろあります☆

近いうちに女の子sideも書きます！

今後ともよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4374q/>

Twinkle...Twinkle...

2011年4月16日13時36分発行